

<なぜメディアは真実を伝えないのか>

ハンバーガーは、「殺し屋」という見出しでマレーシアの保健省が全面広告を禁止したそうです。これは、マレーシアだからできたことで日本では、絶対出来ない事です。日本では、特に食と医療に関して正しい情報は皆無に等しいと思います。何故なら、メディアはそれらのスポンサーによって生かされているのですから。

「不都合な真実」を読んだ方も多いと思いますが、それは企業だけでなく結局巡り巡ってメディアにとっても真実を伝えることは死活問題となることが多いのです。2005年7月17日付の毎日新聞の朝刊紙に年1回職場で実地されていたがん検診を厚労省は、法的義務付廃止の検討に入ったと報じました。これは、がん検診による早期発見、早期治療の有効性が認められないと言う理由でした。

がん検診は、そればかりでなく毎年定期的に行う事により逆に被爆し発ガンする人を増やしているといえます。厚労省は、1998年4月にも市町村のがん検診実地義務を取り下げました。しかし、今でもがん検診は必須と思っている人が多くいます。一般に癌は怖い物で一度罹ったら直らない病氣と恐れられています。ですからがんを早期に発見して治さないと助からないと思込んでいるのです。

私達は、がんと宣告された時どうするでしょうか？

今まで当たり前のように生活していたのに、すぐさまストップして医者の方の決めたメニューに従って手術をすることとなります。そしてがんは、怖い物で少しでも残しておくとも増殖してしまうから根こそぎ取らないといけないといわれゴツゴツとるはめになるのです。それでも命の方が大事ですから納得してしまうのです。

けれども、手術をしたからといってがんがすっかり治癒した訳ではなく手術をしても原発病巣を完全に押さえ込むことはできず、手術に加えて再発予防のための放射線照射やホルモン療法、化学療法(抗がん剤)等が必要となってきます。しかし、これでも癌が完治する訳でもなく一生再発や転移の不安に悩まされていくのです。私達は、癌と知らないでそのまま生活したほうがずっと長く有意義に過ごせるのではないのでしょうか。

慶応義塾大学医学部放射線科講師の近藤誠医師の著書の「患者よ、癌と闘うな」の中にがんを放置していたグループと早期発見早期治療を施したグループとの生存率をまとめたデータがありました。これによると明確な違いが認められなかったそうです。つまり早期発見のための検診は有効性が認められないだけでなく、がんにかかるリスクも負う事になると言うものです。ですから、厚労省が廃止に踏み切ったのです。

ところが、現実はどうでしょう？

相変わらず早期発見早期治療がいわれてがん検診が続けられているのです。

なぜでしょう？

つまり、これを廃止すれば健康診断料金の大幅な値下げや受診者の急減につながります。職場検診だけでも年間3000~4000億円の市場でこれに市町村などによるがん検診や人間ドッグなどで精密検査なども含めたら検診のための巨大な市場が日本に出来上がっているのです。ここで、もし「検査は害あって益なし」などと報じたら医療業界そのものが死活問題になってくるのです。

メディアは、これらの広告の影響を受けて成り立っている世界ですから結局の所事実など報じる事はないのです。これは、先にお話した食品業界とて同じなのです。

パンはカラダに悪いからやめましようと言ったらどうなりますか？

私達はメディアが伝えるものが必ずしも正しくないことを知っておく必要があります。

